ART KISS LETTER

特別号

熊本市現代美術館発行
http://www.camk.or.jp
［2007.夏号］ vol.34
FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum,Kumamoto

熊本市現代美術館開館5周年記念
熊本城築城400年祭記念
熊本国際美術展

アティテュード2007

人間の家

真に歓喜に値するもの

ATTITUDE 2007

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

① 記者会見
② 石田清男さんへのCAMKEESのメンバーによる折鶴のレイのプレゼント
③ ポーンタウィーサック・リムサクンさんの《RGB's War》
④ ハッピィーバースディ！ジュディ・シカゴさん
⑤ 開会式での柴山市長
⑥ 内覧会
⑦ やなぎみわさん
⑧ 浴衣姿のルチェザール・ポヤジェフさん
⑨ 作品設営中のヨーク・ガイスマールさん
⑩ 丸尾會によるハイヤ節公演

The House of Human Beings
Authentically Blessed Jubilance

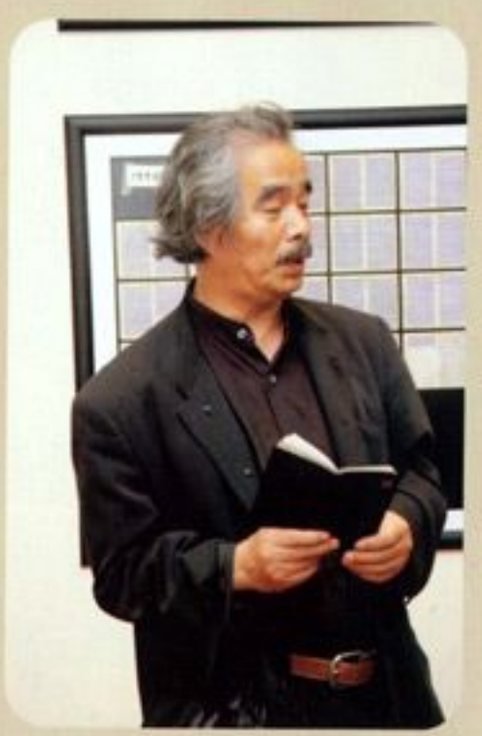
MUSEUM INFORMATION

熊本市現代美術館開館５周年記念展「ATTITUDE2007　人間の家－真に歓喜に値するもの」が7月21日に開幕いたしました！

当館は、そこに身を委ねるだけで、今を生きる勇気が心に満ち溢れるような温かな人間回復の家であることを目指して活動してまいりました。「ATTITUDE2007」は、この基本理念に立ち返る展覧会であり、2002年の開館記念展であった「ATTITUDE」の第２弾となります。本展は、いかなる状況や境地においても芸術は人々を肯定し喜びをもたらすことをテーマに、国内13ケ所、台湾、韓国からの計15ケ所のハンセン療養所の入所者の方々の作品と、それを包み込むように国内外のアーティスト24名、2グループによるイベントで構成されています。
展覧会前には、アーティストが続々と熊本入りし、展示作業を行いました。舌を出した熊本の人々850人以上の写真を展示するガイスマールさんは、当館のボランティア・スタッフCAMKEESの協力を得て、1000枚にも上る写真とドローイングを展示しました。帆立の稚貝を素材に立体を制作する辻綾子さんは、黙々と帆立貝を作品に埋め込んでいきます。着丈450cmにもなるスーツを展示するボヤジェフさんは、形を美しく見せるのに余念がありません。襟新や肩パッドもちゃんと入れています。
本展の開会式は、ラーシャ・トドシェヴィッチのインスタレーション作品《Balkan Banquet》に出席者が着席する通常と異なるかたちで行われました。また、展覧会開催の前日が偶然にもジュディ・シカゴさんの誕生日であり、前夜祭のオープニング・パーティでは、やなぎみわさんが代表して花束を贈呈するなど和やかな雰囲気でした。
オープニングイベントでは、天草の丸尾會によるハイヤの舞台が披露されました。澄み切った歌声によるハイヤ節、躍動感あふれるハイヤ踊りに観客の皆さんも一気に引き込まれ、会場は活気に満ちていました。
21日には「忘れえぬ記憶」、22日には「あなたの『故郷』はどこですか」をテーマに、アーティスト・トークが行われ、作家を取り巻く環境が作品に深く影響を及ぼしていることが窺えました。トークの最後に石田澄男さんが話された「結局作家は、どんな環境であれ、もがきながら作品を制作している点で共通している」という言葉が印象的でした。この2日間が「ゆかた祭」で、多くのアーティストにゆかたを着てトークに参加して頂きましたが、皆さんゆかた姿を楽しんでいらっしゃるようでした。
「ATTITUDE2007　人間の家－真に歓喜に値するもの」は、10月14日まで開催しております。皆様のお越しをお待ちしています。(A.A)

ラーシャ・トドシェヴィッチさんと《Was ist Kunst》

ルチェザール・ボヤジェフさんと《ネオ・ゴルゴタ》


木下晋さんと《ヒエログリフ・ダイアリー》

ヨーク・ガイスマールさんと《"I love you as I am"》

辻綾子さんと《ほたて2004》

作品設営中の辻綾子さん

作品設営中のルチェザール・ボヤジェフさん

作品設営中の川島清さん

記者会見

ジュディ・シカゴさんとドナルド・ウッドマンさんと《ディナー・パーティー》

ズビグニエフ・リベラさんと《レゴ強制収容所》

中山ダイスケさん(左)と山本耕さん(右)

《Balkan Banquet》でのお食事中

ラーシャ・トドシェヴィッチさん、《Balkan Banquet》前の一言

国立療養所恵久光明園のみなさん

芥正彦さんへのCAMKEESのメンバーによる折鶴のレイのプレゼント

ボーンタウィーサック・リムサクンさんの〈RGB's War〉プレイ中

丸尾會主宰の金澤一弘さん

展示風景

内覧会当日はジュディ・シカゴさんのお誕生日でした

丸尾會によるハイヤ節公演

展示風景

丸尾會によるハイヤ節公演

川島清さんご来館＆水俣へフィールドワーク 2007.5.21－23

ATTITUDE参加作家の川島清さんが来館されました。出品作品の《水量—鉄・桜》、《水量—胴体容》の設置の検討と同時に、水俣を訪れた川島さん。その内容を綴ったショートテキストは、ATTITUDEのカタログに収録されています(p40)。この体験が、今後の作品にどう生かされるのか、今からとても楽しみです。(A.S)

内覧会での川島清さん

ハンセン病療養所@韓国　2007.5.24－27

青森の松丘保養園から始まったハンセン病療養所(国内13＋海外2ヶ所)への作品集荷の旅は、韓国の小鹿島(ソロクト)更生園で終わりを迎えた。日本語が話せる金新芽さんに通訳をしていただきながら、高貴煥さんのお宅へ書の作品を見に伺った。前日の土砂降りが嘘のようなお天気に恵まれて、新緑がまぶしい園内を歩きながら、金新芽さんと職員の方が話されている韓国語の響きに、本当に小鹿島に来たのだなと実感した。言葉が通じなくても、快く作品をお貸しくださることは伝わってきて、遠かった道のりのことなど忘れてしまったほどだった。高さんのお人柄があふれている作品を展覧会場内で確かめてほしい。(E.Z)

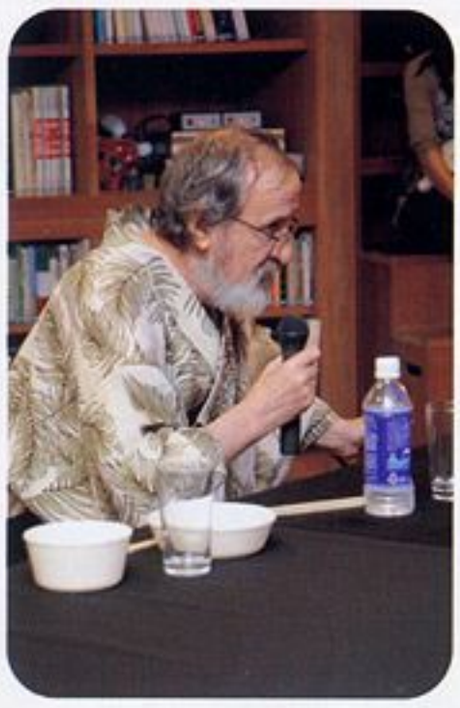
ソロクト更生園入口

「ATTITUDE2007人間の家」展参加作品 南嶌 宏 熊本市現代美術館館長と行く 「はやぶさ」プロジェクト－18時間、東京への旅 2007.5.30－6.3

このプロジェクトは、寝台特急「はやぶさ」号に乗り、18時間かけて東京へ旅するプロジェクトです。若かりし頃、期待と不安、夢を抱いて、「はやぶさ」に乗り込んだ日を思い出し、時間に追われる日常を忘れて、窓越しの風景を眺めながら、18時間に自分の人生を重ね合わせてみることによって、そこで始めて見えてくるものがある、そんな思いからこのプロジェクトは始まりました。

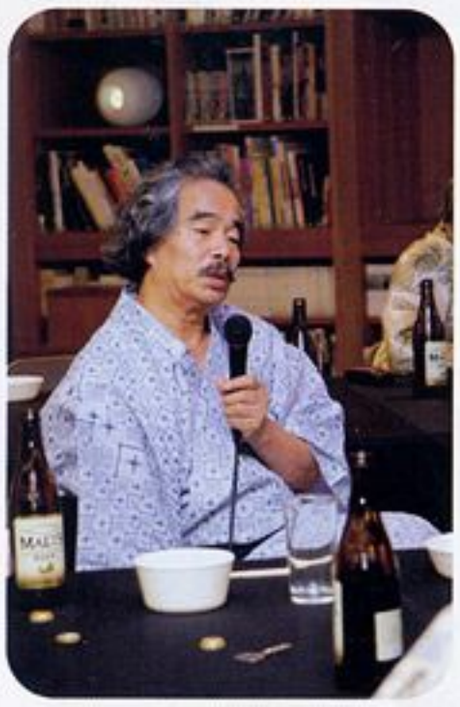
出発当日、熊本駅に集まった参加者は33名。最高齢の79歳の女性から、最年少の中学生の男の子まで、それぞれの胸に秘めた思いを乗せて「はやぶさ」号は走り出しました。しきりはカーテンだけというオープンな車内ですぐに打ち解けた皆さんは、お酒を酌み交わし昔話に花が咲いたり、若者だった頃の自分に思いを馳せたりと、思い思いの時間を過ごしていました。翌朝東京に着いてからは、かつての時間を取り戻すため、それぞれの思い出の場所に足を運んで頂きました。土木関係の会社に就職して初めての現場で作ったという小学校に向かわれた方、学生の頃住んでいたアパートに行き、きれいなビルが立ち並んでいることに驚いたという方、ご友人やご家族に会いに行かれたという方。その夜浅草で行われた懇親会では、すっかり仲良くなった皆さん一人一人の思い出話に大盛り上がりでした。

3日目の美術館めぐり、4日目の自由行動を経て、旅はおしまい。帰りは飛行機で1時間半、旅の諸々を思い返しながらの空の旅。「はやぶさ」での18時間の後のその速さは、感慨深いものでした。(S.Y)


ラーシャ・トドシェヴィッチさん

ズビグニエフ・リベラさん

辻綾子さん


木下晋さん

ヨーク・ガイスマールさん

城東小の盆おどり大会に遊びに行きました

第3回城下町くまもとゆかた祭

熊本市現代美術館は、7月20日(金)、21日(土)の2日間、熊本市の中心商店街一帯で開催された「第3回城下町くまもと　ゆかた祭」に、昨年に引き続き参加しました。今年は、12月から始まる日比野克彦展のプレイベント「明後日朝顔プロジェクト」に取り組んでいる上通、下通、サンロード新市街と美術館を巡る「明後日朝顔スタンプラリー」を実施。これは、明後日朝顔を育てている4箇所全てのチェックポイントを巡ると、自動的にゆかた祭を実施している中心商店街を街歩きすることになり、また最終ポイントとなる美術館では豪華賞品が当たる抽選会に参加できるというもので、美術館が企画、商店街に協力、協賛をいただき、ゆかた祭の全体イベントとして実現、130名以上の方が4ポイントを制覇しました。
また今回は、ゆかた祭と「ATTITUDE2007人間の家」の初日が重なったため、20日、21日の両日催されたトークイベントには、アーティストの皆さんにもゆかたで出演していただきました。空いた時間にも、ゆかた姿で商店街を散策したり、近くの小学校で行われた夏祭りに顔を出されたりと、みなさんご満足の様子でした。特に海外のアーティストは、思いがけず日本の風情を体感できたことを喜んでおられました。
期間中は、商店街の多くの店舗が、ゆかたを着て来店した方々に対して、割引やプレゼントなどの特典サービスを用意しました。また、三年坂のゆるやかな傾斜を利用した長さ30mにも及ぶそうめん流しなど、各所で夏の情緒を感じさせるイベントも目白押しでした。美術館では、受付や監視員、スタッフが来館者をゆかたで出迎え、ゆかたを着て来館された方とスタンプラリーの参加者には企画展「ATTITUDE2007　人間の家」の入場料を半額にするサービスなども実施しました。
ゆかた祭も徐々に市民に認知され、街中には昨年よりも確実に多くのゆかた姿が見受けられました。同時に、美術館にゆかたで来館された人数も昨年より100名以上増加して248名と、商店街と美術館が一体となった2日間でした。(C.I/M.H)

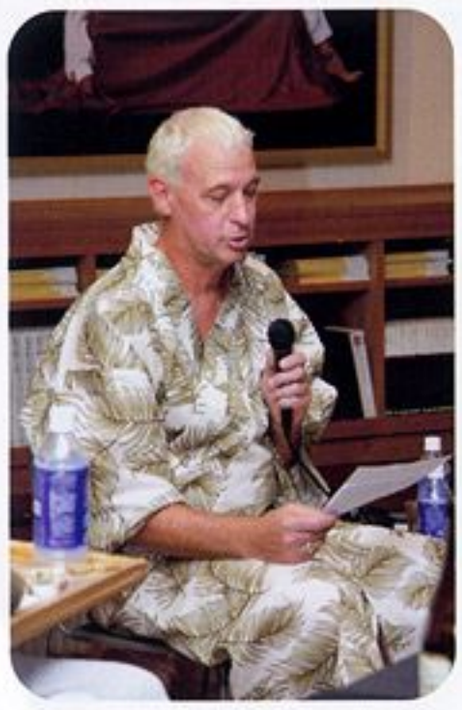
ARTIST TALK アーティストトーク 2007・7・21-22

中山ダイスケさん

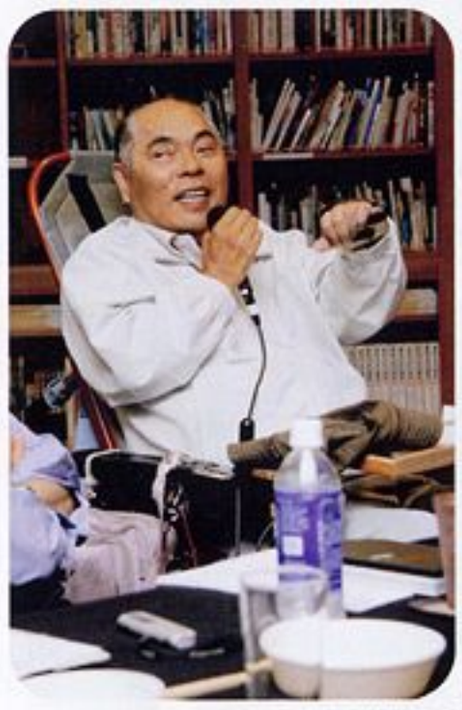
芥正彦さん

やなぎみわさん

ルチェザール・ポヤジェフさん


ドナルド・ウッドマンさん

ジュディ・シカゴさん


石田澄男さん

山本絢さん

アーティストトーク

7／21のテーマ「忘れえぬ記憶」
木下晋
辻綾子
ヨーク・ガイスマール
ラーシャ・トドシェヴィッチ
ズビグニエフ・リベラ

7／22のテーマ あなたの「故郷」はどこですか
芥正彦
石田澄男
中山ダイスケ
やなぎみわ
山本絢
ジュディ・シカゴ
ドナルド・ウッドマン
ルチェザール・ポヤジェフ

日比野克彦さん、熊本の伝統工芸リサーチ中　2007.7.6−7

年末より開催予定の「日比野克彦　HIGO BY HIBINO」展準備のため、熊本の伝統工芸のリサーチに日比野克彦さんが来熊されました。今回ミーティングを行ったのは、花葉蘭@くすのき園（宇土市）、肥後象嵌（白木良明さん）、肥後てまり（鶴田美知子さん）、山鹿灯籠（中島清さん）。作品の制作現場を訪問し、素材や制作手順などを見学したうえで、日比野さんとのコラボレーションの可能性を探る、密度の濃いミーティングが行われました。実際に出来上がる作品がいまから待ち遠しいですね！（H.T）

階段ギャラリー展示替えしました！　2007.7.25

北部東小学校児童作品展「からくり人形」が始まりました。熊本の人なら誰もが知っている郷土玩具「おばけの金太」、その「おばけの金太」を唯一作り続ける人形師の厚賀新八郎さん。北部東小学校の5年生は、厚賀さんから「からくり人形」についてお話を聞き、それをきっかけに、からくり人形作りに挑戦しました。展覧会会期は、①7月25日（水）〜8月6日（月）5年1組。②8月8日（水）〜8月20日（月）５年２組。③8月22日（水）〜9月3日（月）５年３組です。一人一人の個性が輝いている展覧会です。写真パネルにて子どもたちが頑張っている制作過程も展示しています。夏休みを美術館でゆっくり過ごしてみてはいかがでしょうか。（N.I）

命の花壇に夏の花々が植えられました!!　2007.6.19

6月19日の休館日、熊本養護学校農芸班の生徒さんと先生方が命の花壇の植え替えをしてくれました。生徒さんの笑顔とやる気のおかげか、ずっと続いていたじめじめの梅雨空も、この日だけは太陽が顔を見せた農芸日和となりました。この日植えられた、夏の間美術館の玄関を彩ってくれる花々は、サルビア、インパチェンス、マリーゴールド、ペチュニアです。そして、なんとなんと花壇の向かいには今冬に行われる日比野克彦展事前プロジェクトの明後日朝顔のプランターがあります！
と、いうことで、この夏の間、美術館の玄関では命の花壇の花々と明後日朝顔の共演が見られます。やっぱり花いっぱいの美術館はいいですね。農芸班の生徒さん、先生、いつもいつもきれいな花と花壇をありがとうございます！（S.Y）

プレママ美術館ツアー　2007.6.16

学芸員の案内で、美術館の子連れやプレママにも優しいフリースペースと、開催中の「美の教室、静聴せよ」展をじっくり鑑賞。森村さんによる三島の演説を、おなかの中で「胎教」として聞いている赤ちゃんたちの、将来がとっても楽しみです！？赤ちゃんたちと次は「ファミリー・ツアー」で再会しようね、と約束してお別れしました。（A.S）

ファミリーツアー　2007.5.19

まだまだ音声ガイドを聞くことのできないこどもたちと、その保護者を対象に、学芸員が「美の教室」をゆっくりとご案内しました。モナリザコーナーは大人気でしたが、驚いたのは「放課後」の三島ルーム。全員がぐずることなく「静聴」していたんですよ。きっとみんなの心に、モリムラ先生の思いが通じたんだなあと思い、感激したひとときでした。（A.S）

モクモク工房　4.12／5.10／6.14／7.12

毎月第2木曜に開催中のモクモク工房。今年4月から8月までは中級コースとして展示会を目指して制作しています。参加者各々がテーマやモチーフを決め、創意工夫をこらして作り上げた作品は8月20日からキッズファクトリーで展示します。みなさんの陶芸への情熱が伝わる素敵な作品の数々をぜひ見に来てください。（A.T）

GIII vol.47　元田久治展　（2007.5.30-7.29）

熊本出身で、現在東京で活躍する元田久治（1973−）さんの展覧会を開催しました。出品作品は2004年から展開をみせている東京の名所を主題にした版画作品で、その緻密な世界に引きとめられて、しばし眼をこらす姿も多く見られました。熊本での個展がはじめてということもあり、テレビやラジオでも多く報道されました。
最終日の7月29日に行われたアーティスト・トークでは、公立美術館の初個展がいきなり国外でハンガリー、英語も通じず苦労したことなどお話されながら、過去の作品を紹介しながら現在の作風までの変化をたどりました。
ひきつづいて行われた版画ワークショップでは、事前に申込みをされた参加者のみなさまとともに簡易リトグラフでの制作を行いました。下絵を版に描き、製版、インクをつめて、プレス機で刷るというたくさんの手順をふんで出来上がった作品に大満足の様子でした。2時間以上にわたる長時間のワークショップでしたが、こどもから大人まで時間の経過を感じずに熱中されていたようです。（H.T）

SUITOTTO Kumamoto

【スイトット・クマモト】

本年度のスイトット・クマモトは、熊本の華人インタビューです。（インタビュアー・構成：藤原江美）
＊いける＝花を生かす、ことと考え、ここでは「生ける」と表記します。

【肥後宏道流編】

結婚を期にいけばなを始めたとおっしゃる吉冨三翠先生には、お会いするたびにそのきりっとしたたたずまいにはっとさせられる。「お花なんて絶対できないと思っていましたね」とは意外な言葉だったが、今では生花に使うお花を考えながらお庭でお花を育てられているという。若いお弟子さんたちと和気藹々とただ稽古をするだけではなく、大きな華展の後は必ず反省会を行い、成長が感じられることはとてもうれしいことですねとひとこと。そういった蓄積がお花にも表れるのだと思う。いけばなを始めて世間が広くなりましたとおっしゃる先生が、ついつい使ってしまうお好きな花は柳や朝鮮槇とのことだが、先生にはすっと伸びる葉が印象的な杜若がお似合いだと思った。

熊本の華人展vol.3作品

熊本の華人展vol.3生けこみ風景

【藤久流編】

正座の練習をと思って始めましたと、意外なエピソードから話が始まった後藤茹光先生。祖父が盆栽などをやっていて花には興味がありましたから、自然にお花を始めた感じですとおっしゃる先生に藤久流の特徴をお聞きしたところ、器を殺さず材料を生かした生け方をする点でしょうかとのこと。お話の中で印象的だったのは、「花の気持ちになって生けていると花言葉が出てくるというか、自分だけではなくて相手を尊重するようになりますね」という言葉で、いけばなだけの話ではないような気がした。いけばなとは生活の安堵の場、心が癒されますとおっしゃる先生のついつい使ってしまうお好きなお花は椿とのことだったが、太い幹から生き生きと立派な葉が広がるヤツデが先生にはぴったりな気がする。

Letters from CAMKEES

熊本市現代美術館は、約260名のボランティアスタッフ「CAMKEES（キャンキース）」によって支えられています。第3回目は布絵本ボランティアさんをご紹介します！

（写真1）

（写真2）

（写真3）

（写真4）

当館キッズサロン（写真1）には、普通の紙の絵本の他に、布でできている絵本「布絵本」（写真2）があります。布絵本は、パーツを取り外したりくっ付けたりして遊びながら、子どもたちが布の手触りや温かみを感じることのできる絵本です。その布絵本の整理や修理をするのが、布絵本ボランティアチームの大きな仕事です。たくさんのパーツの中には、3〜4cmほどの小さい物もあるので、無くなってしまったり壊れてしまったりすることがあります。そういったパーツを「子どもたちが直接触れて遊ぶものだから」と、布絵本ボランティアさんが一つ一つ心を込めて作ってくれています。現在総勢15名。子どもたちが安心して楽しく遊べるキッズサロンを守るために活動しています。
布絵本ボランティアではこの春から、新しい試みとしてキッズサロンに設置するためのCAMKオリジナルタペストリーの制作を始めました。美術館ならではのタペストリーにしたい!!ということで、春夏秋冬の季節に合わせた、可愛らしい絵のような4種類のタペストリーを制作する予定です。いろんな動物や植物、果物のパーツが季節に合わせて森を彩る四季のタペストリー。子どもたちが自由に絵を描くようにパーツをくっ付けて遊べるようになっています。（写真3）
現在は、春のタペストリーを制作中です。一つ目ということもあり、皆さん手探りの中での制作ですが、「フェルトに芯を貼ると丈夫になるわよ」「チューリップの色、この色もいいんじゃない？」と、方法やアイディアを出し合いながら楽しんで制作を進めてくださっています。（写真4は制作中のボランティアさんです!）
来年の春には、4種類とも完成予定です。キッズサロンに現れる四季の森をお楽しみに!!（S.Y）

大番外

当館学芸員が心動かされた芸術・文化の動向について語りあうコーナー、「大番外」。

ooh-vanguard!

第6回

「明後日朝顔プロジェクト」を語る

坂本顕子、冨澤治子、岩崎千夏、橋本真紀子

坂本：「明後日朝顔プロジェクト」は、日比野克彦さんが展開しているアートプロジェクトで、2003年の新潟の妻有でスタートして、今年で5年目になりますが、日比野さんは、いつ頃からこのプロジェクトをずーっと続けてみたいと思われたのかな？
冨澤：岐阜県美術館で開催された「HIBINO DNA AND 日比野克彦応答せよ」のオープニングで日比野さんが話していたのは、新潟の妻有トリエンナーレで、拠点の地に菰平（あざみひら）を選んだときに、地元の方々が「何も無いからお花でお迎えしよう」と、たくさんのお迎え花で迎えてくれて、それに感動して「花」を作品に取り入れたということでした。
2006年に、新潟・菰平の「明後日新聞社社屋」を初訪問したのですが、ここが元祖ですからやっぱり規模も大きい。社屋のまわりにぐるっとロープを張ったり、竹で作ったドーム型の東屋とか、朝顔シャワーとか、造形的な工夫がされていました。
橋本：朝顔プロジェクトが始まったきっかけのひとつだと思うんですが、「100の指令」（朝日新聞社、2003年）でも「2階まで朝顔を伸ばしてみよう」というのがあって、社屋はそれを実行していますよね。
2005年に水戸芸術館で開催された「HIBINO EXPO 2005日比野克彦の一人万博」展の「Hotel Hibino×agnes. b」というワークショップに応募したら、抽選に当たって参加できたんですよ。日比野さんと一緒にみんなで館内に一泊したんですが、その時も庭に朝顔で囲まれたシャワーが設けられていて、夜、お風呂に入れないから、水着でシャワーを浴びる時間がありました。ホテルの上等なシャワーヘッド使って、いい感じだったんですけど、女子はほとんど使わなかった（笑）。日比野さんはシャワーを浴びていましたよ。
坂本：今年は国内14地域で開催、熊本も初参加なんですが、市内だけでもじわじわと「やりたーい」という声が広がってますよね。来年は市役所あたりで出来るかもしれないし、夢が膨らみます。「日比野克彦HIGO BY HIBINO」展は今年度の開催ですが、朝顔プロジェクトはずっと継続できるかもしれないって予感がしますね。
岩崎：金沢21世紀美術館みたいに、大きく1ヶ所でやるっていうのもひとつのやり方だけど、ちっちゃくたくさん、という方法もあるよね。熊本は、天草、杖立、市内のそれぞれが、それぞれでいろんな場所で、網の目のようにじわりじわりと広がっていく感じかな。
冨澤：いわゆる「現代美術」っていう感じでもないし、意気込みがいい意味で少なくて、「私にもできる！」っていう感じがするのかもしれない。
岩崎：朝顔ってツルがびゃんびゃん伸びる。あれを見ているのは楽しいよね。花が咲くのももちろんだけど、日々の成長が伸びる楽しみがあるよね。
坂本：朝顔にはみんな共通の人生の思い出がありますよね。芽が出て、花が咲いて、枯れて、種が残るという盛り上がりがあるのもいいんでしょう。一年草だから、1年に一回ずつリセットされてメリハリもある。しかも朝顔のツルは、形作ったものにツルで巻きついていける。造形的にもゆとりや遊びがあります。
冨澤：国内14地域というのは、今までにない広がり方ですよね。こういう展開は、明後日朝顔プロジェクト史上初めてで、新潟で育てて、水戸で育てて、というふうに最初はそれぞれ単発のイベントみたいな感じだったのが、継続して育てていく中で、明後日朝顔のコンセプト自体もどんどん変わっていったんでしょうね。朝顔の種が繋がりを作っていくっていうアイデアに広がっていった。
朝顔プロジェクトはみんなで行うっていう広がりを持つ中で、原産地の純粋化みたいところにはあまり比重が置かれないんだよね。ぜったい新潟のじゃなきゃだめ、というところがない。
岩崎：たまたま新潟から来た種、水戸から来た種があって、熊本がスタートとなる種もあるし、あっていい。熊本からまた次に繋がっていくところがポイントなのかな。
坂本：育てる過程が大事なんだよね。
冨澤：プログレス（過程）っていうところに焦点をあてると、いま日比野さんが一番力を注いでいる方面と重なるよね。すごくたくさんの人が、日比野さんやアートに関わることができるツールのひとつなのかな。
坂本：参加者は、自分達の物語、マイ・ヒストリーをつくるっていうところにドキンと来るのかもね。これは水戸から来た種なんですよってお話しすると、「へえー！」ってすごく関心を示してくれる。みんなでストーリーをつくる過程に参加できるっていうのがポイントなんでしょう。日比野さんのプロジェクトって、そこに関わることで出逢った友達に会いたいからって言って、すごく遠くから駆けつける人も多い。今年は熊本からも金沢のプロジェクトのために朝顔の苗を送ったけど、ちゃんと育っているか見に行きたくなっちゃう。
冨澤：育てるっていうことで濃厚な繋がりあいが生じているよね。
坂本：頑っちゃうし。天草行って、あまりに綺麗な仕上がりで「やばい！美術館、地味かも！」と焦ったり、さきに他で花が咲いてしまったら、「負けた！」とか思うし（笑）。
橋本：私も、以前日比野さんのプロジェクトで知り合った人に、岐阜で会えた時は嬉しかったし、そういう同窓会みたいな喜びもあるんです！金沢21世紀美術館で開催する「ホーム→アンド←アウェー方式」っていうアートプロジェクトのタイトルは、朝顔プロジェクトにもぴったりですよね。
冨澤：城東小学校で種を植えた時も、明後日新聞をつくっている女子美の学生が東京から来てくれましたね。彼女も、こへび隊（注：妻有アートトリエンナーレサポーターのグループ名）で出合った顔見知りの家に泊めてもらったりしていました。
岩崎：朝顔という繋がりをきっかけに、「よっしゃ、ひと肌脱いだるか！」っていう親身な関わりが生まれてるよね。
今、熊本県内でもいろんな所で、私達も知らないところで朝顔プロジェクトに関わっている人がどんどん増えつつあるじゃない？今育てているのが次の種を実らせたら、種の交換会をしてもいいかもしれないね。配った種が、植えられて、育って、また種となって帰ってくる…。美術館が種のセンターになっていくとか？
橋本：実は、美術館の朝顔に、美術館入口の「命の花壇」でもお世話になっている熊本県立熊本養護学校高等部農芸班の先生が、昨日肥料いれてくださったんですっ！そういうかたちで関わってくれている方々がどんどん増えてきています。美術館正面玄関で育てている朝顔の大きなプランターも提供していただいております！
坂本：日々つい、「あれは、こうしたらいいかも」とか考えちゃいますよね。運転中とか。まるで小さな恋人状態（笑）。
橋本：天草の丸尾焼の金澤一弘さんが、明後日朝顔の基本理念、「種は…」っていう言葉は、実は「日比野は…」って置き換えられるんじゃないかっていうお話をされていたんです。そうすると面白いんですよ。「日比野は、まだ見ぬ先へ想いを馳せている。」「日比野は、見知らぬ土地に行く事が出来る船である」とか、日比野さんの展覧会とかイベントがあると「行こう！」って思うから、ああそうだなーって思いますし。「日比野の船に乗れば明日の明日へと繋がっていく。そして…明後日の姿へと想いは広がる。」ね、結構納得できるでしょう？
一同：おお、なるほど。
橋本：日比野さん自身が種になっているんだなあって思いました。
岩崎：朝顔プロジェクトを進める中で思ったんだけど、日比野さんがきっかけをくれて、それに刺激を受けた人が活動を開始するっていう動きがあるよね。明後日朝顔プロジェクトの基本理念に則っていれば、プロジェクトの中にいろんなイベントが受け入れられていく。今年、熊本の商店街ではゆかた祭（7月21-22日）で、上通・下通・新市街・美術館で育つ明後日朝顔を見て歩く朝顔スタンプラリーが実施されたり…。
坂本：日比野さんのプロジェクトって、多くの人が関わってどんどん拡大していくものですよね。アーティストって全てに目配りしたいと思う人も多いし、そうすると想いはすごく濃くなるけど、どうしても規模は小さくなる。日比野さんの場合はその反対。
冨澤：日比野さんは「共有」というポイントに敢えて強くこだわっているんでしょうね。
橋本：日比野さんの、水戸で開催された「HIBINO EXPO 2005 日比野克彦の一人万博」展を紹介する番組で、漫画家のしりあがり寿さんがイラストを書いて、「これは一人万博じゃなくて、万人一博だね。いろんな人が関わってひとつの展覧会が出来ているから」っていうお話をしていて、日比野さん自身が「なるほど！」っていう顔をされていました。
冨澤：熊本の日比野展で紹介される予定の、熊本の伝統工芸を巻き込んだプロジェクトも、素材や制作手順ではなくて、その「技術を支えてきた人や文化」に日比野さんが注目しているのがポイントなんです。これまでずっと大事に継承されてきた文化の力、それを支えた地元の人達の力と日比野さんが協働することで、熊本という地と日比野さんのあいだにまたひとつ、新しい展開がみえてくる感じがします。
岩崎：「HIGO BY HIBINO」は朝顔や、作品や、伝統工芸が、これから熊本だけのスタイルでゆっくり繋がっていく感じはする。その為にも、もっと日比野さんに熊本のことを知ってほしいな。
冨澤：朝顔が育っていくのとあわせて、熊本県下で行われる大きな動きとして「HIGO BY HIBINO」が育っていくんでしょうね！これはもはや展覧会名ではなくて、大きなプロジェクト名として捉えたいですね。

当館で咲いた朝顔

城東小学校の生徒さんと種植え

上通パビリオンの朝顔

城東小学校の朝顔

当館キッズサロンに日比野さんに
朝顔マークを描いて頂きました！

明後日朝顔の基本理念

種は、まだ見ぬ先へ想いを馳せている。
種は、時を越える事の出来る乗り物である。
種は、見知らぬ土地に行く事が出来る船である。

一粒の種の中には今までの無数の記憶が蓄積されている。
一粒の種の中には次に伝えるたくさんの思い出が詰まっている。

記憶と思い出が今日を過ごして花を咲かせると、
明日の種が生まれてくる。
種の船に乗れば明日の明日へと繋がっていく。
そして・・・明後日の姿への想いは広がる。
日比野克彦

上通パビリオンの朝顔

明後日朝顔プロジェクトHP　http://www.asatte.jp/asatteasagaoproject/

ART de GYAN!

[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう？」の意です。

[MAY-AUG] 2007

「築山節生　装飾古墳の世界」展

2007.5.29-6.3　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

佐賀県出身の画家築山節生さん（故人）の個展。出品作品は、教員退職後から没年まで行われた装飾古墳シリーズの水彩画で、王塚装飾古墳館に寄贈されたもの。1965年頃から1984年まで描かれたそれらの作品は、色彩はステンドグラスのような華やかさを持ち、伸びやかな筆遣いは自由奔放である。20年間ライフワークとして行われたであろうそれらの画業の蓄積は、見事な迫力を放っていた。(H.T)

「第26回熊日新人書道展」

2007.6.19-6.24　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

熊日創立40周年を記念して創立され、若手発掘や県書道界の充実、拡大を目的に毎年開催されている。
今年は258点の応募があり、特選15点。準特選68点。秀作102点の計185点が選ばれた。
審査は県書道連盟役員7人がした。作品は例年に比べて多彩な書風や書体が目立った。特に高校生の作品はみずみずしくて、臨書、創作ともに斬新でよく練り上げられており努力のあとが見られた。(S.K)　写真提供：熊本日日新聞

「熊大附属小、中学校PTA美術同好会絵画展」

2007.6.20-6.25　アートスペース大宝堂
熊本市上通5-6　TEL354-2155

宮崎静夫先生のご指導の元、20年続いている熊大附属小、中学校PTA美術同好会の絵画展が開催。大学時代美術部だった人から、会員になって初めて絵筆を握った人など約30名の方々が会員として在籍されているという。「宮崎先生の、絵には上手も下手もない、よい絵か悪い絵かだ。良い絵とは、その人にしか描けない絵のことだ、という励ましの言葉と、やさしい仲間がいるから続けていられるようなものです。
自分のペースで描かせてもらっています。」と語る坂崎裕子さんの作品は、深い青色が心に残る物語性の高い作品で、期せずして着て来られていたお着物とぴったりで印象的だった。絵を描く楽しさが会場内にあふれていて、これからもずっと描き続けていただきたいと思った。(E.Z)

「Joint 2007」展

2007.7.31-8.12　崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町10-25　TEL323-1158

芸術には境界線があると思われるだろうか？ここでは、芸術の境界線を飛び越えた作品をみることが出来る。日本画・洋画・彫刻・デザイン、といった様々なジャンルが"Joint"という名の下で、6人のアーティスト達がストーリーを繰り広げている。
6人のアーティストとは、崇城大学院芸術研究科修士課程を昨年修了し、現在は別々の道を歩みながらも、「制作を続けたい」という志のもとで集った精鋭人のこと。社会人になってからの活動をまとめた6人のギャラリー展である。
"Joint"とは、「節」「共同」といった意味であり、今回のギャラリー展に込められたメッセージである。《幾線》は人物の輪に惹き込まれてしまうような作品であり、《時の番人》は色鮮やかな絵で現実と離れた世界観がある。また、ユニバーサルデザイン食器などの数々が展示されている。異なるジャンルによって存在する空間は私たちを不思議な世界へといざなってくれる。様々な作品は、観る側にでさえ、色々な感情を生み出させてくれる。
アーティストの一人、岩永さんが"Joint"メンバーの思いを語ってくれた。
「影響力がある作品を制作したい。私たちがこういったギャラリー展を開催することによって、芸術に携わる人を増やし、熊本から世界へと繋いでいきたいんです。」
社会に出て第一歩を踏み出した若いアーティスト達の新鮮な感覚を、彼達と共に"Joint"してみてほしい。(Y.A) (Ka.M)

「藤川治子油彩展」

2007.7.21-7.30　画廊喫茶三点鍾
熊本市手取本町3-8有明ビル　TEL326-3040

藤川治子さんの32回目、3年ぶりの個展である。風景、静物画が20数点展示されていた。黄色やピンクを多用した作品は、内側からほのかな光を感じさせるとともに、時間の移ろいをも表現している。なかでも、《朝は鳥になった》は、永遠不変に起こる自然の営みの崇高さが表され、見る者の心までも浄化させる作品となっている。静物を描いた《柘榴》では、彼女の優れた色彩感覚が発揮されていると同時に、ざくろの瑞々しさといった質感までもが描かれている。次回は、彼女の描く人物画も見てみたい。(A.A)

「アルモノデ展」

2007.7.23-7.31　equipment:FLOOR
熊本市南坪井町7-16　TEL323-1197

空間装飾デザイナー、太田リカさんのカフェ・ギャラリーでの個展。厚手の綿をベースにして、生地をそのまま活かすように素材や染色方法などをすべて我流で思考錯誤しながら作ったという作品が、壁や棚、天井やテーブルの上に並べられていた。古民家をアトリエとして借りるようになってから自然を体感する毎日だという太田さん。そこからうける日々の小さな感動をかたちにして作られた作品は、暖かく、発見と楽しさに満ちているように見えた。ごく自然に空間に馴染み、心地よい雰囲気を作り出す展示は、彼女の空間装飾デザイナーという肩書きのとおり、作品ありきの展示ではなく空間ありきの作品なのだという思いが伝わってくるものであった。(S.Y)

「第3回 押花の魅力展」

2007.8.7-8.12　熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35　TEL324-4930

この展覧会は、押し花教室を開いている5人の先生方が集まり、開催されたものです。窓からは緑が見える会場は、畳の上に上がって鑑賞できるようになっており和の雰囲気の中での展示となっていました。そこでは、自然と作品が一体となっている様子でした。作品は四季ごとに分けて展示してあり、それぞれの先生方の感じた四季が表現されています。草花などの作品の材料は、自分の家の庭に咲いているものや道端や山に咲いているものから集められています。草花を自然の風景に見立てた繊細な作品や抽象的な作品など色鮮やかな作品が展示してあります。その中のひとつに平安時代の十二単を着た女性と御所車をイメージして作られた作品があります。すべて草花で作ってあり、女性の髪や御所車の一部には茄子の皮も使われています。誰も思いつかないような工夫もされていました。色紙で作られたように見えますが、よく見ると花びらで作られています。
押し花教室の先生のひとり、大坪涼子先生によると押し花を始めてから日頃から自然に目を向けるようになり、自然を見る目が変わったそうです。一見色あせてしまいそうですが、作品は虫や湿気を防ぐように真空加工されており、半永久的にそのままの状態を保つことができます。また、会場では押し花を体験することができ、さらに展示作品は交渉すれば購入することもできるそうです。
(S.O) (A.S) (H.K)

「銀光展」

2007.7.10-7.16　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

銀光会は昭和8年に田代順七、松岡正直、太田黒幸、米村潤之の四氏が中心となって結成された。昭和9年の第一回展以降、戦時中の中断もあったが、今年で第70回を数える。今回は、会員や会友のみならず、広く一般の作品も選ばれ、257点の多彩な作品が展示され、盛大な記念展であった。また、この展覧会にあわせて、会の発足から展覧会の歴史を丹念に調べあげた「銀光会の歩み」が発行され、熊本画壇に関する貴重な資料となった。(Y.H)

「第３回熊本市東部公民館 木曜絵画教室作品展」

2007.7.21-7.31　画廊喫茶ジェイ
熊本市大江本町6-9（味噌天神電停前）　TEL372-8732

海や川、町や建物を題材とした風景画7点と壺や花、果物を描いた静物画8点。夏の光を思わせる鮮烈な色使い、自然の懐の深さを感じさせる力強い印象の作品の中で、村上豊さんの《鯛の塩焼き》はモチーフを柔らかく暖かい色彩で描いている。鯛に添えられた菜の造形と青さがそこに緊張感をもたらしている。長田明さんの《たそがれ》では、某ハンバーガー店の黄色い色と誰もが知っているそのマークが、他の部分との対比において作品の叙情性を高めることに成功している。(A.O)

「第20回 GROUP-愚-作品展」

2007.8.7-8.12　熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

GROUP －愚－ 作品展は福岡教育大学で書道を勉強し卒業された熊本出身の宮田祐子さん、右谷展子さん、山西寿子さん三名による書のグループ展である。
三名は流派に属しているわけではない。「流派の枠を超えて自分たちの字が書けていければいい」と取材を受けて頂いた右谷さんはおっしゃっていた。
作者それぞれが家事や教員の仕事をされるかたわら、展覧会は、なんと今年で20回目を迎える。今回のテーマである「愚」という言葉には、自らを愚か者として卑下するのではなく、愚かであるからこそ高みに上がっていけるという向上心が込められているのだそうだ。作品については、大変自由な発想で「書」かれており、書に対する難しさを感じさせず、我々の生活に近い親しみ易さがある。また展覧会全体を通して印象を受けたのが、同作者の作品でも一作一作書体や作風が違っているところだ。作者名を確認しなければ10名ほどのグループ展かと思うほどである。これこそ前述の自由な視点による制作があらわれている点であり、作者は自分の形式にすら囚われず一作一作「作品」が求めるままの形態を掬い上げているようであった。
近年携帯電話やパソコンの普及により、（特に若い世代は）記号化された文字に偏りがちになっていると思われる。そこで右谷さんは、文字自体の持つ面白さをもっと若い人々にも敬遠せずに知ってもらいたいと語っていらっしゃった。(Y.Ma) (D.T)

「備前焼 萩野雅也作陶展」

2007.8.7-8.12　熊本県伝統工芸館
熊本市千葉城町3-35　TEL324-4930

岡山県にて陶作をおこなう萩野雅也さんによる備前焼の展覧会。展示室いっぱいに器、花器、壺、香炉など、生活の中で側に置いて使いたくなるような味のある作品が並ぶ。全体的に赤茶色の印象を受けるが、よく見ると、その中にも色彩の幅があり、手に馴染みやすそうな形のものが多かった。
そのなかでも、三角形の小皿や、緩やかな曲線が美しい日本伝統工芸中国支部展入選作品、ろくろでひいた後に手でひねりを加えた水差しが目を引いた。
今年4月に独立したばかりの陶芸家で、展示品の中には6月に窯出しした新作もある。
今の備前焼は一度の焼成で焼き上げるのが主流だが、萩野さんは納得いくまで同じ物を何度も焼くことで、こってりとした色合いを出すところを特徴としている。焼き物の表面に灰が降りかかり、それらが溶けて焼き付くとできる自然釉で、赤や青白い模様も何度も焼くという工程の中で見つけたそうだ。
備前焼は鉄分を含んでいる土を使っているので、触ったり、水にくぐらせたりして、使い込むうちに、窯出ししてすぐとは違う、艶のある色になっていき、更に、器を弾いた時、鉄に近い澄んだ音になるとのことだ。料理や、花を楽しむことだけでなく、器自体の移ろいゆく姿も使いながら楽しむことが出来ると思った。(Y.Mu) (M.U)

「森野晃市作品展」

2007.8.7-8.12　ギャラリーカフェ　トト
熊本市上通り町5-46上通りイーストンビル3F　TEL352-7162

作者の森野晃市さんは熊本県美展や銀光展に出品するなど、日本画仲間らとのグループ・膠彩(こうさい)で毎年展覧会をするなど非常に精力的に制作をされている方だ。
初の個展だという今回、苔生した岩壁や割れたたこつぼ、波止場に繋がれた絡まりあった縄などからおもしろみを感じ、その美しさを受け取ったまま日本画に描き出すように制作されたという大小様々の作品計15点が展示されていた。
ご家族との旅行で飛行機に乗り、上空から見たコロラド川の河岸の浸食や水の色、岩肌に感銘を受けて制作されたという作品では、日本画ならではの水干絵具や岩絵具の独特のマットな質感に、意識的に大胆なでこぼこのひび割れを施した表面の組み合わせが、森野さんがご覧になった風景をまざまざと思い浮かべさせてくれるような印象を受けた。
天草の海を描いた作品では、熊本に長く住んでいらっしゃるご本人曰く、汚されていく海への哀しみを感じながら描いていったという。すべての作品には特殊でこそないが日常的に目にするものも多く含まれており、それらに気付き描いていくという作業の優しさが感じられる展覧会だった。(Ke.M) (A.N)

今回は、学芸員実習生の皆さんにも、ギャラリー取材にトライしていただきました。執筆者は以下のとおりです。
＊ 敬称略、50音順。＊ ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載。
赤松由梨(Y.A)・宇田もも(M.U)・太田黒翔代(S.O)・川原瞳(H.K)・末次亜美(A.S)・竹野大喜(D.T)・永田礼香(A.N)・丸吉ゆかり(Y.Ma)・村上由紀(Y.Mu)・村木賢一(Ke.M)・村田佳帳子(Ka.M)

Letters from Artists

アーティストがみずからの作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

◎第7回／田部光子(たべ・みつこ)さん　(from 日本)
1933年旧台湾生まれ。「九州派」に参加。国内外で個展開催、また執筆活動など精力的に活動。近年研究が進む戦後女性アーティスト再考における重要人物のひとりでもある。

Q1《人工胎盤》についてお聞かせ下さい。

『二千年の林檎』(西日本新聞社、2001年)でも少し触れましたが、《人工胎盤》は、1961年9月に東京銀座画廊で「九州派展」の時に出品しました。その時に、私は妊娠していてね、「真の女性の解放は、妊娠から解放されなければ有り得ない」っていう思いを作品にしたんです。当時よく使っていた素材のアスファルトピッチで基礎をつくってそこに脱脂綿を貼り付けて、体内に真空管を仕込んでました。そんな素材だからすぐ汚れちゃってね、12年後くらいに処分する時に燃やしたらよく燃えたー(笑)。
当時の作品写真のうえのほうに展示してあるのは、子供のマネキンの胴体を素材にして、ボディーにタイルを貼ったりしている作品。これはね、子供がまだお腹のなかに入っていたから作れた作品で、いまとなってはなんだか不憫で無理ですね。この作品はまだ納屋のなかから探せば出てくるかもしれない。
《人工胎盤》を作ったときの反響は、それはもうすごくて、「こんな作品をつくったらお腹の子にどんな悪い影響が出るか」などと心配もされました(笑)。当時の男性雑誌『土曜漫画』(1961年10月20日号)には、「女性器にいどむ芸術家たち」という馬鹿馬鹿しいタイトルでインタビューも全く受けていないのに破廉恥なでたらめばっかり書かれてびっくりして怒り心頭でした。しかも《人工胎盤》と一緒に展示した《プラカード》5点には、私のキスマークが作品に使われているんですが、それが女性器に口紅を塗ってスタンプしたもののようだ、なんて実しやかに書かれている。どうやってやるのよねえ？無理、無理(笑)。《プラカード》5点と《人工胎盤》(2004年再制作)は、栃木県立美術館で開催された「前衛の女性　1950－1975」展(2005年)に出品されました。
再制作した《人工胎盤》は、新しい素材を選ぶ時に、原作の白くてふわふわした感じを重視しましたので、そういう生地を選ぶのを8月に行ったものですから大変暑い思いをしました。この素材から、新しいボックス・アートの作品を6点制作しました。ちょうど《人工胎盤》の子供にあたります(笑)。
《人工胎盤》の内側に仕込んである真空管も、今では入手困難で、そういうルートを知っているマニアにご協力いただきました。なかなか手に入らない真空管を作品に使いましたので、見る人が観たら、「おっ！」と思うそうですよ。
この《人工胎盤》とほぼ同時期に林檎をモチーフにした作品の制作を始めました。林檎を主題としての制作はライフ・ワークとしてずっと継続しているのですが、《人工胎盤》のように、人体をモチーフにしたのは、他には《花》シリーズくらいのものです。若い頃「一流の芸術家は人体をテーマにしなくてはいけない」などと聞かされて、「そういうものか」と思って作品に取り上げていたのですが、どうやら私には向いてないみたいです。
以前読んだ、カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』の評論を、福岡の同人誌「ガランズ」14号(2006年、「ガランスの会」発行)に書きました。《人工胎盤》をつくった自分の立場から読むと、その登場人物である「提供者」たちが妊娠機能を持たないこと、クローン人間であること、アートを制作するカリキュラムによって「心」を育てたことなど、読み進めるうちに明らかになって行く物語の構成要素の断片がどうしても頭から離れず、忘れることが出来なくなったためです。

Q2 読者の方にメッセージをお願いします。

《人工胎盤》を制作した1961年は、荻野式避妊法の誤差のせいで妊娠した時でした。《人工胎盤》が熊本市現代美術館の収蔵作品展で展示された時、一般の鑑賞者の方のメッセージの鋭さに驚いたことがあります。「イタイ、イタイと言ってるような作品に思える」と書いてあったのです。(「ハッピー・ホーム　CAMKコレクションvol.2」展、2005－2006年)女性というのは、血盆経の昔から、産の血、月水の血の穢れと見做されて、産むも産まずも血の池地獄に堕ちると説かれていたのですから。イタイ・イタイ人生だったと思います。
熊本市現代美術館の企画展は、全国でも群を抜いて素晴らしいと思います。熊本市民の方々は居ながらにして、国際的作家や作品に出会えるのですから、うらやましいです。私も地元より、熊本に足しげく通っているような気がします。これからも、見る人の力と、制作者のコラボレーションで、文化をつくっていきましょう。

Q3新作はどこで見ることができますか。もしくは今後の展示のスケジュールをお教え下さい。

今年の9月10－16日、ギャラリーまいづる(092－738－0655)にて個展を行います。
福岡市美術連盟展に出品します(2007年9月19－24日)。
来年は1月15日より2週間、ギャラリー58(東京・銀座四丁目、03－3561－9177)にて個展開催予定です。
2008年3月－5月にギャラリーto.ko.po.la(福岡県田川市、0947－45－1152)にて個展開催予定です。
2008年6月にギャラリーとわーる(福岡市新天町、092－714－3767)にて個展開催予定です。
蠟気楼美術館運動、どこにでも展開中です。
私のスタジオは、いつでも歓迎です。(要予約:092－801－0495)

《人工胎盤》展示風景(1961)

《人工胎盤から生まれた子どもたち》(2004)作家蔵

《プラカード》(1961)作家蔵

《人工胎盤》(1961／2004)熊本市現代美術館蔵

information

熊本アートパレードの応募要項配布中です

「第19回熊本市民美術展　熊本アートパレード」の応募要項の配布を始めました。今年の審査員は菊畑茂久馬さんです。テーマは「ときをこえて」。作品搬入は10月19日(金)～21日(日)の3日間です。時間帯がそれぞれ異なりますのでご注意下さい。展覧会は11月3日(土)～18日(日)に開催します。
また、応募規定の変更がありますので、必ず応募要項をしっかり読んで制作を始めてください。今年の応募要項はぐっと紙面が大きくなり見易くなりました！見開きA3サイズです。美術館の入り口や館内に設置しています。皆様のご応募を心よりお待ちしております。(N.I)

編集後記

今回の特別号はいかがだったでしょうか？当館開館にむけたプレイベントとして発刊をはじめたAKL、現在開催中のATTITUDE2007と歩みをそろえて、開館5周年特集号として発刊しました。展覧会出品アーティストの活き活きとした姿や、現在進行中の日比野克彦さんの活動の様子など、ご紹介したい写真群のなかから一番すてきな表情が写りこんだものを選んで掲載しました。次号はもとのサイズ・スタイルにもどりますが、5周年をひとつの区切りとして、さらに心を新たにしてAKLの充実をめざしてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

編集長　冨澤治子

※執筆者一覧原稿文末にイニシャルで記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda(熊本市現代美術館主任学芸員)
蔵座江美
Emi Zoza(熊本市現代美術館学芸員)
冨澤治子
Haruko Tomisawa(熊本市現代美術館学芸員)
坂本昭子
Akiko Sakamoto(熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩菱
Aki Ashida(熊本市現代美術館学芸員)
竹田　茜
Akane Takeda(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
伊豆菜々
Nana Izu(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
矢加部　咲
Saki Yakabe(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
小山明日香
Asuka Oyama(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
岩崎千夏
Chika Iwasaki(熊本市現代美術館主査)
橋本真紀子
Makiko Hashimoto(熊本市現代美術館主事)

●発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.34
2007年8月発行(夏号)　◎無料◎
●発行人／南嶌　宏　編集長／冨澤　治子　●印刷／コロニー印刷
●デザイン／(有)松永　社デザイン事務所
●発行／熊本市現代美術館　〒860-0845 熊本市上通2-3　TEL.096-278-7500　FAX.096-359-7892